

## 軽度発達障害のある幼児の行動変容に関する実践的研究

— 幼児の行動に対する保育者の理解と支援との関連から —

(経過報告)

広島大学大学院 松井 剛太

## A Research of behavior modification of children with mild developmental disorders: Relevance between teacher's understandings and support for children's behavior

(A Progress Report)

Hiroshima University MATSUI, Gota

本研究の目的は、軽度発達障害のある幼児の保育所での行動変容を、保育者の理解と支援との関連から分析することを目的とする。対象児は広汎性発達障害の幼児2名である。フォーカス・グループ・インタビュー (FGI) を使用して、幼児の行動に対する保育者のとらえ方の前後を調査し、保育者の行動のとらえ方と支援の変化と対象児の変化を分析した。その結果、FGIの使用により、保育者は幼児の行動に対するとらえ方が个体論的視点から関係論的視点に変わり、対象児に対する支援に関係性を取り入れるといった影響を与えることが示唆された。その変化は対象児の行動変容にも顕著に表れていた。今後は、軽度発達障害児の支援において関係性の重視が子どもの行動変容にどのような影響を及ぼすのか、より詳細に検討する予定である。

**【キーワード】 軽度発達障害 幼児 行動変容 フォーカス・グループ・インタビュー**

A purpose of this study is aimed at analyzing behavior modification of children's with mild developmental disorders from relevance between teacher's understandings and support for children's behavior. Object children are two with pervasive developmental disorder. With focus group interview (FGI), I investigated front and back of teacher's understandings for children's behavior and analyzed change of support and a change of object children. As a result, teacher's understandings changes from a viewpoint of individual to a viewpoint of relations with environments by use of FGI, and support for a child change. It showed the behavior modification of an object child conspicuously. It is going to examine teacher's understandings gives what kind of influence with behavior modification of children with mild developmental disorders in future.

**【Key words】 mild developmental disorders, children, behavior modification, focus group interview**

## 問題と目的

現在、LD, ADHD, アスペルガー症候群といったいわゆる軽度発達障害のある子どもへの支援は、学校現場で喫緊の課題である。平成 14 年に文部科学省が調査研究会に委嘱して実施された「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」の結果により、知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で著しい困難を示す児童生徒が 6.3 パーセントいることが明らかになった（文部科学省，2003）。以降、軽度発達障害のある子どもが抱えている困難さへの認識が高まり、実践レベル、研究レベルで支援方法の検討がなされてきている。これまで軽度発達障害に関する多くの書物が出版され、軽度発達障害のある子どもの行動特徴が明らかにされてきている。主な行動特徴は、学習上の困難さ、対人関係の構築やコミュニケーションがうまくできないための社会性の困難さ、注意集中や行動・感情のコントロールに対する困難さである。これらの行動は、2つの視点からとらえられる。それは、個体論的視点と関係論的視点である。個体論的視点では、子どもに素因としての障害があるために、顕在的障害の行動が生まれるとされる。一方、関係論的視点では、子どもに素因としての障害があったとしても、周囲の人的環境や物的環境との関係の中で生じた困難が行動として顕在化すると解釈される。すなわち、子どもの行動は、「素因である障害からの直接的な結果」としてとらえるのが個体論的視点で、子どもの行動は、「素因である障害と周囲の環境を介した結果」としてとらえるのが関係論的視点である。

軽度発達障害の子どもに行う支援は、行動のとらえ方で変わる。例えば、軽度発達障害の子どもの行動が個体論的視点からとらえられた場合、軽度発達障害の子どもに対する指導上の困難は、障害があるから指導が困難であるとされる。それゆえ、個体論的視点からの支援は、子どもの障害特性を理解し、それに応じた対応となる。だが、軽度発達障害の子どもの行動が関係論的視点からとらえられた場合、現在行っている指導、学級風土、環境から軽度発達障害っぽい行動が起こっているとされる。それゆえ、関係論的視点からの支援は、子どもの問題行動が起こっている背景を理解し、それに応じた対応となる。これまでの研究や出版物を見ると、前者の支援に関するものが多い。障害別の対応マニュアルやパンフレットなどは、前者にあたりと考えられる。しかし、現在では、後者の関係論的視点からの支援についても検討されつつある。例えば、軽度発達障害の子どもを含めた学級経営の進め方や集団づくりのあり方が見直されてきている（河村，2005；橋本，2007）。この視点では、対象児と周囲の子どもとの関係で双方がどんなことで困っているか、教室の環境や学校風土は対象児にとって困ることを作り出していないか、といったことを検討し、座席位置、板書の仕方、掲示物などの環境設定を見直す。つまり、軽度発達障害のある子どもの課題を学級集団づくりによって解決するというのが支援の基本である。

本研究では、軽度発達障害のある幼児の行動に対する保育者のとらえ方と実際行っている支援との関連を検討する。そして、保育者のとらえ方の変化が軽度発達障害のある幼児の行動変容にどのような影響を及ぼすのか分析する。幼児期の子どもは、軽度発達障害に見られる行動が発達の過程や保育者の指導性によって表れる場合も少なくない。それゆえ、とりわけ幼児期の子どもに関しては、周囲の環境から受ける影響を考慮して子どもの行動をとらえる必要があると考える。

## 方 法

### 1. 対象

対象園は、広島県内のA保育園（在籍乳幼児，140名；保育士，19名）である。本研究の対象とした子どもは、広汎性発達障害の診断を受けているS児（4歳）とY児（5歳）である。S児の家族構成は父，母，本児である。S児はテレビ，ビデオが好きでアニメのキャラクターをよく覚えている。保育者は，S児は，「落ち着きがなく部屋にいることができない」，「笑顔なのに他児の顔を突然叩くことがある」といった行動を課題と考えていた。また，特に休日後に落ち着きがないことを気にかけていた。Y児の家族構成は父，母，姉，本児である。Y児は，ブロックや粘土が好きで一人遊びが多かった。こだわりが強く集団での活動が苦手であった。

### 2. フォーカス・グループ・インタビュー

本研究では，子どもの行動の背景について，保育者のとらえ方を調査する手法としてフォーカス・グループ・インタビュー（Focus Group Interview；以下，FGI）を使用した。FGIはグループダイナミクス理論を背景とするグループ討議の手法であり，具体的な状況に即した特定のトピックについて質的な情報を把握できると評価されている（Vaughnら，1996）。FGIはもともとマーケティングやビジネスの業界において，消費者の意識を質的にとらえるための調査手法として30年以上にわたって使用されてきた。しかし，近年，福祉・教育などのヒューマンサービスの分野においても，サービスの改善に向けた取り組みの中で数多く使用されており（細川，1999；丸山ら，2000），多様な分野で使用できる手法として認識されてきている。

FGIの討議は半構成的なインタビューの形式をとる。つまり，インタビュアーがあらかじめ用意しておいた質問項目を議論の流れの中で適時問い，それに参加者が答えていく。インタビュアーの手順としては，①導入，②FGIの目的の説明，③FGIの方法の説明，④具体的で答えやすい質問で開始，⑤グループダイナミクスが起りやすいように道案内としての役割，⑥次への発展につながるように要約，である（高山ら，1998）。こうした手順に沿って実施された議論の内容を，ビデオやテープに録音し分析する。FGIにおける分析は，基本的に議論の中で重要と思われる発言内容を「重要アイテム」としてできるだけ抽出し，その「重要アイテム」を類似した内容ごとに「重要カテゴリー」に分類する方法で行われる。こうして分類された「重要カテゴリー」が議論の主題となり，「重要アイテム」がその内容となる。そうした過程を経て，分析者が参加者の意見を集約的にまとめ，目的に応じて記録する（安梅，2001）。

本研究では，保育者が複数の事例を出し合うことによって，さまざまな保育場面における対象児の課題から，問題行動の背景を把握し，その後の保育の改善に活かすこととした。

### 3. 手順

本研究では，まず保育者が対象児の行動をどのようにとらえているか，そして，どのような対応をしているか，を個別インタビューと保育観察にて調査する（事前調査）。その後，フォーカス・グル

ープ・インタビューを用いて対象児の行動の背景について分析する。そして、その結果、保育者の支援がどのように変化し、どのように対象児が変わったかを明らかにする（事後調査）。

## 結果と考察

### 1. S児の事例

#### (1) 事前調査 —S児の行動と保育者のとらえ方—

筆者が担当保育者に対して、個別インタビューを実施した。その結果、S児の問題行動として2つの行動が挙げられた。第一に、S児が自分のクラス（青組）にいないことが多いことである。S児は、登園してまず別のクラス（黄組）に行き、テレビを見るという行動をしていた。保育者は、そこから自分のクラスに戻ろうとしないことに保育のしづらさを感じると述べた。第二に、S児が集団活動に加わらないことである。S児は、集団活動から離れて一人で違う遊びをすることが多かった。そのため、集団での活動が実施しづらいことがあった。

これらの行動について、担任は、S児が自分のクラスへの所属意識がないためであるとしてとらえていた。そのため、S児に自分のクラスであるという認識を持たせなければならないと考えていた。

#### (2) 事前調査 —保育者の支援—

筆者が個別インタビューの実施後、担任がS児にどのような支援を行っているか調べるため、保育観察を行った。担任は、S児にクラスへの所属意識を持たせるため、朝のルーティーン（自分のクラスでノートに登園のハンコを押す）を守ることをねらいとして支援していた。その際、絵カードを使用していた。まず、S児が登園後に「テレビを見たい」と要求した場合、担任がテレビの絵カードをS児に渡して移動させるようにした。そして、移動したクラスの先生がそれを受け取り、10分間テレビを見せた後ノートの絵カードを渡し、それを持ったS児が自分のクラスに戻り、担任と一緒にノートにハンコを押すという手順である。この手続きを通して、保育者はS児が自分のクラスへの所属意識を持ち、集団活動への参加も促されるという結果を期待していた。

#### (3) 事後調査 —FGIの分析と保育者のとらえ方—

S児の問題行動の背景を調べるため、担任保育者と園内の保育者12名を対象に、FGIを使用した調査を実施した。調査の様子はすべてビデオで撮影し、その記録をもとに分析を行った。分析の結果はFig.1に示す。

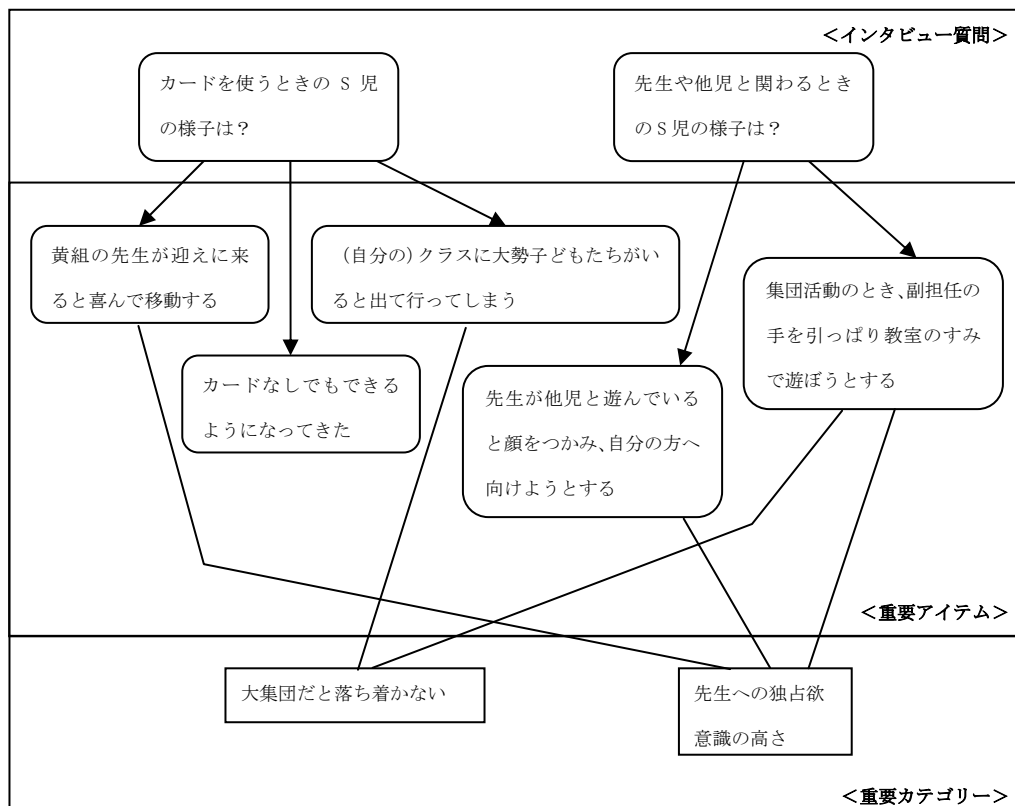


Fig. 1 FGI の結果 (S 児)

調査の結果、「大集団だと落ち着かない」、「先生への独占欲、意識の高さ」が＜重要カテゴリー＞として抽出された。つまり、他の保育者の意見も総合すると、S 児が自分のクラスにいないことが多いことや集団活動に参加しないことについて、S 児が自分のクラスへの所属意識が薄いためという担任保育者の見解とは別のとらえ方がなされた。S 児が登園後、別のクラス（黄組）に移動するのは、黄組の先生への独占欲によるものであることがわかった。また、集団活動に加わらないことについても、大集団だと落ち着かない様子が明らかになった。この結果は、いずれもそれまでの担任保育者のとらえ方とは違っていた。

#### (4) 事後調査 —保育者の支援—

筆者が FGI の調査後、その後の担任保育者の支援が変化したかどうか調べるため、保育観察を実施した。

保育観察の結果、S 児に対する絵カードの使用は継続されていた。しかし、それまでと変わり、絵カードが朝のルーティーンの流れを知るためではなく、保育者とのコミュニケーションを促進するために使用されるようになった。これは、FGI の結果を受けて、「先生への独占欲、意識の高さ」を効果的に利用するためであった。つまり、FGI による担任保育者の認識の変化により、S 児と保育者と

の関係性を重視した支援に変化したことが示唆された。

### (5) S 児の変化

保育者の記録から、FGI 実施前と実施後の S 児の変化について、結果を以下に示す (Fig. 2)。

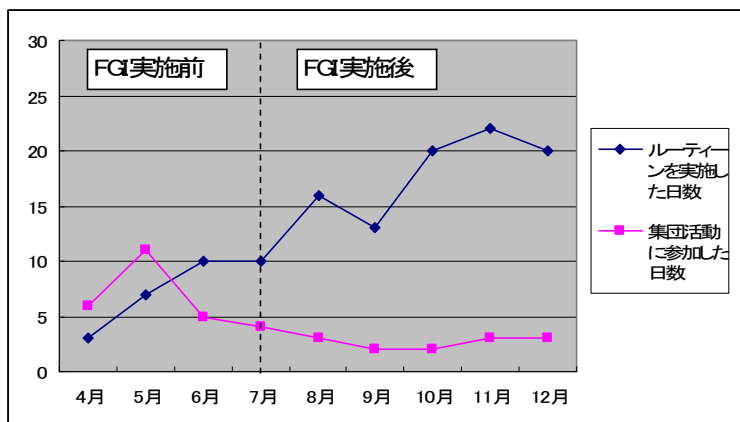


Fig. 2 S 児の変化

FGI の実施によって、S 児の行動に対する保育者の認識と支援が変化してから、ルーティーンの実施回数が増えた。一方、集団活動への参加については変化が見られなかった。

これは、絵カードの使用が機械的なものからコミュニケーションを重視したものへと変化した結果、S 児と担任保育者との関係が円滑になったためと考えられる。だが、S 児の集団活動への参加は変化していない。これは、S 児に対する支援が S 児と担任保育者の二者間の関係にとどまったためと考えられる。

### 現段階でのまとめと今後の展望

S 児の事例では、当初、保育者は「障害のある子には絵カードの使用」という固定観念から、個体論的な視点での支援に終始していた。しかし、FGI の実施で S 児の行動に対するとらえ方が変わってから保育者との関係を重視した支援を実施した。保育者の支援が変わってからは、S 児の行動も一部が改善された。保育者による子どもの行動のとらえ方と支援方法は関連しており、子どもへの影響にも違いが出る。本研究の結果により、FGI は子どもの行動をとらえる際に有効な方法であることが示唆された。

現在、Y 児の事例を検討中である。Y 児の事例では、保育者は Y 児の行動を関係論的視点からとらえ、保育室の環境設定に工夫をする支援が見られる。S 児の事例では、S 児と保育者の二者間の関係性に基づく支援しか見られなかったが、Y 児の事例では保育室内の環境要因も含めた結果が得られると思われる。今後は S 児の事例と Y 児の事例を比較し、保育者の認識の違いが子どもの支援と対象児

の変化に及ぼす影響の違いを明らかにする予定である。

## 引用文献

安梅勅江（2001）ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開．医歯薬出版株式会社．

橋本創一（2007）特別支援教育の実践にあたって心がけたいこと．児童心理，858，52—58．

細川えみ子（1999）グループインタビューによるニーズ把握—住民の本音を聞く方法．保健婦雑誌，55(10)，823—828．

河村茂雄（2005）学級担任の特別支援教育—個別支援と一斉指導を一体化する学級経営—．図書文化社．

丸山 昭子・安梅 勅江（2000）夜間保育サービスの今後の課題に関する研究—施設長・保育専門職のグループインタビューを通して—．日本保健福祉学会誌，7(1)，41—47．

文部科学省（2003）「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査 調査結果」

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301i.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/018/toushin/030301i.htm)

高山忠雄・安梅勅江（1998）グループインタビュー法の理論と実際．川島書店．

Vaughn,S & Schumm,J,S, & Sinagub,J.（1996）Focus Group Interviews In Education and Psychology. SAGE Publication.

<謝 辞>

本研究の実施にあたり，ご協力いただいたA保育園の先生方やS児，Y児とご家族に深謝いたします。

